

① ポストコロナドライアイ診療

Dry eye clinical practice in the post-COVID-19 era



高 静花 Shizuka Koh
大阪大学大学院医学系研究科
視覚先端医学 寄附講座准教授
E-mail: skoh@ophthal.med.osaka-u.ac.jp

KEYWORDS

ドライアイ, ポストコロナ

はじめに

新型コロナウイルス感染症 (coronavirus disease 2019: COVID-19) は 2021 年 1 月現在, その猛威は衰えるところを知らずに感染拡大中である¹⁾。2020 年春の感染第 1 波においては, 各国で都市封鎖 (ロックダウン) が行われ, 全世界の社会・経済が極めて大きな影響を受けたのみならず, 医療も甚大な影響を受けた。世界中で電子媒体, 紙媒体など合わせて膨大な数の COVID-19 と医療に関する情報が次から次に発信されている。眼科においても国内外の学会組織から感染拡大時の臨床における指針や対応策などが提言されており, 臨床における知見などが続々と論文報告されている。眼科臨床においては, 緊急症例以外すべての手術や外来診療が余儀なく中止, 延期となった国や地域も多かった。緊急ではないため, あるいは感染を恐れて来院できなかったために, 定期的な診察を受けることができなかった慢性眼科疾患の患者も多かった。

COVID-19 とオキュラーサーフェス

ドライアイは代表的な慢性オキュラーサーフェス疾患である。SARS-CoV-2 (severe acute respiratory syndrome coronavirus 2) のオキュラーサーフェスを介した感染性については多くの報告がなされているが, 検査方法や感染者の

重症度, 人種の違いもあり, その結果は一定したものではない²⁾⁻⁵⁾。

COVID-19 感染者においては, ドライアイ症状がみられることが報告されている⁶⁾⁻¹⁰⁾。その発症時期, 持続期間, 発症の割合などはさまざまである。COVID-19 感染者における前向きな検討となると限られた検査しか行うことができず, それこそ自分が感染する可能性もあるため決死の思いをもって研究を施行された。その結果をきっちりと知見としてまとめて残してくださったことにはただただ感謝の気持ちでいっぱいである。概ね COVID-19 感染者においては, 結膜, 涙液を介した感染性の可能性は有り得ると考えられている。

国内大学病院における ドライアイ診療

診察施設体制や地域背景により, 状況は異なると思われるが, 筆者の施設におけるドライアイ診療をほぼ 1 年前の 2020 年春から振り返ってみる。なお, 筆者の所属する大阪大学医学部附属病院の眼科では, 大学病院という性質上, 他病院からの紹介症例や自己免疫疾患合併症例 (主に涙液分泌減少型ドライアイ), 複雑な背景をもつ症例などがほとんどであり, オフィスワーカーやコンタクトレンズ装用に伴うドライアイの症例は少ない。

国内くすぶり状態の 3 月に, 外来の全スリットランプにシールドを導入し, 患者にマスク装用を徹底した。筆者自身, フルオ